

# 「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムの 対象者のニーズとプログラム目標の再検討

目白大学人間学部 宇野 耕司

## 【要約】

本研究は「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムのプログラム対象者のニーズとプログラム目標に関する仮説を参加者の認識や経験を基に再検討することを目的とした。

プログラムの実施後に自由記述を用いたアンケート調査を行った（8クール，N=62）。52名から回答を得た。質問内容は「プログラムへの参加動機」とプログラム目標に関連した「家族との関係を再確認」，「親として成長」，「子育てなどにおいて助け合える関係」の3つについて「できたか」と「それはどんなことか」とした。分析方法はKJ法を用いた。

結果，自由記述が249，小チームが53，中チームが19，大チームが7であった。これらのデータから図解化と文章化を得た。

結論として，プログラム対象者のニーズは支援者を通じた参加者のニーズの記述だけでは不十分であり，参加者の望むニーズを再記述した（例，出会いたい，交流したい，知りたい，気分転換，外出したい，そして，家族関係の再確認）。特に「同じくらいの月齢の子を持ち近くに住む母親と出会い，交流したい」ことが明確になった。プログラム目標に「余裕やゆとりの回復」を追加した。また，得られた自由記述から「夫に対する認識の変化」は不十分な記述であることが明らかとなり「パートナーとの関係を結び直す」に書き換えた。以上より精緻化された暫定的なインパクト理論が再編成された。今後，得られた仮説をもとに，アウトカム評価を行う必要がある。

キーワード：乳児，子育て支援，コミュニティ・ベースド・アプローチ，プログラム評価，KJ法

## 問題

0歳児の児童虐待による死亡事例が後を絶たない（厚生労働省，2017）。国は虐待死を防ぐため，緊急に実施すべき重点対策としてハイリスクケースの早期発見，早期介入，再発防止の重点対策，とりわけ事後的対策の強化をあげている（厚生労働省，2018）。しかし，事後的対策の強化を進める必要がある一方で，児童虐待の未然防止，いわゆる1次的予防も行う必要がある。1次的予防は，健全育成のシステムとされ，講演や研修会，啓発パンフレットなどによる知識の普及等の啓発活動，親自身が子育ての悩みや不安をかかえこまないよう，親同士の交流をはかる子育てサークルの普及，中高生の子

育て体験学習など広い意味での子育て支援活動が含まれる（山本，2008）。区市町村は子育て支援の具体的なプログラムとして，予防啓発，養育支援訪問事業や地域子育て支援拠点事業などを実施してきた。しかし，虐待を未然に防止するためにはハード面の整備だけでなく，すべての子育て家庭を対象とする健全育成の観点に基づいたより効果的な子育て支援プログラムの開発・発展・普及が求められる。

これまで本邦ではノーバディズ・パーフェクト・プログラム，トリプルP，コモンセンス・ペアレンティングなど海外から導入された効果的なプログラムが実施され，効果の検証が進められている（河合・野口，2007；柴田，2006；

柳川・平尾・加藤・北野・上野・白山・山田・家本・包丁・志村・梅野, 2009)。しかし、これらのプログラムは、0歳児を初めて持つ母親に特化されているわけではない。そして、ペアレンティングを学ぶことが目的となっており、社会関係の促進（例えば、家族以外の子育てを通じた友人、仲間を得ること）をプログラムの主たる目標としているとは考えにくい。虐待を含めた不適切な養育のリスク要因に、地域を転々とする（Butchart, Harvey, Mian, Fürniss & Kahane., 2006）や子育てにおける社会的孤立（庄司, 2008）が考えられている。このことから、ペアレンティングの向上のみならず、社会関係を促進する子育て支援プログラムが必要である。とりわけ、虐待の未然防止の観点からは初めて0歳児を育てる時から社会関係の促進が必要である。

本研究の対象となっている「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムは（以下、本プログラムとする）、0歳児（生後2～3か月の乳児）を初めて持つ母親を対象とした援助方法である。これは、助産師と保健師による子育て支援のボランティア活動として1999（平成11）年から始まった。2003（平成15）年度からはA市に必要な子育て支援プログラムとして認知され、補助事業となった。2006（平成18）年度からは任意団体によるボランティア活動の位置づけから特定非営利活動法人ウイズアイ（以下、NPO法人ウイズアイとする）による活動に位置づけ、また、2012（平成24）年からはB市で実践が開始された。本プログラムは保育付き連続講座である。特に子育ての自主サークル化を促進することによって参加者同士の子育てにおける支え合いを現実化しようとしている。参加者の参加満足度が高く（宇野・増田・遠藤・蒲原・黒田・伊藤・宮崎, 2016）、初めて出産した第1子の母親に子育て仲間と出会う機会を与え、孤独な密室育児・育児不安・ストレスの解消を図るものとして実施してきた（NPO法人ウイズアイ, 2014）。しかし、参加者の心理・社会的側面が変化するかを科学的な手法で実証しているわけではなかった。2013（平成25）年まではプログラムを説明する資料は少なく、プログラムのガイドラインやマニュアルがない中で実践家であるファシ

リテーター（以下、ファシリテーターとする）の経験に頼って実施されてきた。プログラムの効果に関連する要素は潜在化しており、プログラム活動が何か、どのような因果の連鎖でプログラム活動がアウトカムに結び付くのかをファシリテーターは明示的に記述できていなかった。プログラム要素の何を介入の対象とするべきかが不明であった。つまり、科学的根拠を検討することすら難しい状況にあった。

ところで、社会問題や社会状況を改善するために設計された社会的介入プログラムを、より効果的なものに改善・発展させる体系的で科学的なアプローチの一つにプログラム評価（Program evaluation）がある（Rossi, Lipsey & Freeman, 2004 大島巖監訳 2005）。その方法論の一つに、「プログラム理論・エビデンス・実践間の円環的対話による、効果的福祉実践プログラムモデル形成のための評価アプローチ法（CD-TEP評価アプローチ法；An Evaluation Approach of Circular Dialogue between Program Theory, Evidence and Practices）」がある（大島, 2011）。大島（2011）によると、CD-TEP評価アプローチ法は「効果的プログラムモデルの開発評価（Ⅰ）、発展評価（形成・改善評価）（Ⅱ）、実施・普及・更新評価（Ⅲ）」という3つの評価ステージに分かれている。各ステージにおいて、「新しく導入された実践プログラムあるいは必ずしも効果が上がっていない既存の実践プログラムを、効果的で有用性の高いプログラムモデルに発展させるために、プログラム理論（T）と科学的根拠（エビデンス）（E）の活用、実践現場の創意・工夫のインプット（P）の継続的反映によって実現する方法をまとめたもの」である。また、「プログラム理論と科学的根拠（エビデンス）、実践現場からのインプットの継続的な“円環的対話（Circular Dialogue）”によって、効果的なプログラムモデルに関する知識と経験および成果を蓄積し、現場の実践家やサービス利用者・家族、政策立案者などの実践プログラムに関わる利害関係者がそれらの知識・経験・成果を共有して、根拠に根ざした合意形成を行い、より効果的な実践プログラムに発展させることを目指している」ものである（大島, 2011）。

宇野（2015）では、CD-TEP評価アプローチ法を援用し（以下、CD-TEPとする）、プログラム評価に必要な前提条件を確認した。具体的には、本プログラムによって改善をめざす社会問題や社会状況、プログラムの対象とする標的集団及びプログラムの全般的使命（プログラムゴール<sup>1)</sup>）を概念的に説明し、記述できることを確認した。しかし、プログラム目標<sup>2)</sup>は十分な検討ができていないなど、さらなる評価可能性アセスメントの重要性が指摘された（宇野、2015）。そこで、宇野（2016）は、ファシリテーターが書いた文書類やファシリテーターから聞きとったことを資料にして、本プログラムの評価可能性アセスメント<sup>3)</sup>を行い、本プログラムが評価に必要な前提条件を満たしていることを確認し、プログラム理論（インパクト理論・プロセス理論<sup>4)</sup>）を図示した。宇野（2016）でインパクト理論に記述されているプログラム対象者のニーズは、「情報を求めている」、「孤立しがち」、「仲間を求めている」、「育児の経験不足」、「育児不安を抱きがち」であり、プログラム目標は、「育児方法の獲得」、「孤独感の軽減」、「育児不安の解消と自信の獲得」、「夫との関係を結び直す」、「自主サークル化」である。プログラムゴールは「母親が自分らしく健康に暮らす」ことと「子育てしやすい社会作り」を下位概念とした「ウェルビーイングの促進」である。以上のプログラム目標とプログラムゴールに関する仮説は十分に実証されていない。プログラム目標の試行的評価として、宇野（2018）は本プログラムの実施前後において「育児不安の解消と自信の獲得」を測定し検証した。その結果、自信のなさ因子得点に改善の方向で有意差があり（宇野、2018）、プログラム目標の妥当性が一部検証された。このようにインパクト理論の妥当性を実証的に明らかにする試みが進められているが、インパクト理論の記述が必ずしも十分ではない。

NPO法人ウイズアイ（2014）によると、「家族との関係を再確認する」、「親として成長する」、「助け合える関係を作る」きっかけを得る」とプログラム目標が試行的に記述されている。確かに実践を行っているファシリテーターの考えるプログラム目標の妥当性は高い可能性

がある。しかし、宇野（2016）で整理したプログラム目標と比較すると、これらのプログラム目標は操作的定義が十分に可能な概念ではない。ただし、宇野（2016）においても「夫との関係を結び直す」と定義化されているが、その具体例を明らかにできていない。つまり、参加者は本プログラムに参加したことによって、親として成長することや家族との関係、あるいは助け合える関係をどのように認識しているのかを具体的に明らかにできていない。言い換えると、効果評価のためにプログラム対象者の心理・社会的側面の何を観察、測定すべきかがあまり明確ではない。また、宇野（2016）で整理されているプログラム対象者のニーズについても参加者がニーズ（参加動機）をどのように認識しているのかを具体的に明らかにできていない。

以上を整理すると、宇野（2016）で提示した暫定版インパクト理論の問題点は、参加者の認識を直接的に反映できていない点にある。先にCD-TEPの方法に実践現場の創意・工夫のインプットがあると述べた。これはプログラムのファシリテーター（支援者）だけでなく、プログラムの助成元、プログラムの参加者などの利害関係者を含めた実践現場である。これらの利害関係者の意見を聞き取り、実践現場の創意・工夫・改善点を反映していくのがCD-TEPである。ところが、これまでの研究では主にファシリテーターの経験が反映されてきたものであった（宇野、2015；宇野、2016）。今後の課題は、プログラム理論を構築するために参加者の認識や経験を反映させていくことである。

## 目的

本研究は「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムのより効果的で妥当なプログラム理論を構築するために、プログラム対象者のニーズとプログラム目標に関する仮説を再検討し、再記述することを目的とする。特に、プログラムの参加者の参加動機と参加後の認識を明らかにし、インパクト理論に参加者の認識を反映させ、より妥当性を高める。

## 方法

### 1. 調査対象者

東京都A市とB市において本プログラムに参加した母親であった。プログラム参加者を募集する際に「同じ月齢のママ達と、楽しくおしゃべりしませんか。何もかも初めての育児は、気になることがたくさん!体重の伸びは大丈夫?授乳間隔はこれでいい?みんなはどうやっているのかな?おっぱいとオムツ交換の繰り返し、睡眠不足の毎日…もういや!これって私だけ?今のうちから育児でパパの出番をつくるにはどうすればいいか?考えてみませんか?」とチラシに記載していた。

調査は2014年11月～12月(B市)、2015年1月～3月(A市とB市)の期間に実施し(8クール、計64名)、回収できた52名分のデータを分析対象とした(回収率81.3%)。なお、このうち未回答があった項目と人数は「助け合える関係」では3名、「家族との関係を再確認」では3名であった。

### 2. 調査項目

無記名自由記述式のアンケートを実施した。教示は「このプログラムをさらに良いものとするために、以下の質問についてできるだけ詳しく教えてください」とし、「このプログラムになぜ参加しようと思ったのですか?」という参加動機とプログラム目標に関する「家族との関係を再確認できましたか?それはどんなことでしょう?」、「親として成長できましたか?それはどんなことでしょう?」、「子育てなどにおいて助け合える関係が得られましたか?それはどんなことでしょう?」を質問した(NPO法人ウイズアイ, 2014)。どのような変化が得られましたか、という全般的な変化に関する質問ではなく、プログラム目標に関する質問をすることでより具体的で操作可能な参加者の認識に関する記述が得られると考えた。なお、上記以外の質問(年齢など)は、データの背景を知るうえで必要な情報であるが、0歳児を連れてきている参加者の回答負担を軽減することと、本研究の目的の達成に直接関連しないことから行わなかった。

## 3. 分析方法

### 1) KJ法

KJ法による分類と図解化を行った(川喜多, 1967)。KJ法を用いることで、自由記述から得られたデータの意味とその関係を見出すことができ、再検討に必要な仮説生成が可能と考え、方法は先行研究も参考とした(宇野・藤岡・三好・渡邊・永野, 2016)。

自由記述は「」で示し、自由記述、小チーム、中チーム、大チームの一行見出しは順に『』、〈〉、《》、【】で示した。一行見出しのデータ数は、自由記述が249、小チームが53、中チームが19、大チームが7であった。

#### (1) グループ編成

本研究では、自由記述をカードに記述する手順を省き、Microsoft社のExcelに入力し、エッセンスと考えられる記述部分に一行見出しをつけた。記述内容に異なる事柄があった場合、上記で述べたエッセンスと抽象度を考慮しながら、切片化した。一行見出しは、抽象度をあげないように柔らかく元の記述内容の肌触りが伝わるように努めた。本研究では質問項目ごとにチームを編成した。チーム編成の際には、研究者の分類枠組みに基づく分類に固執しないよう、「吐き出された意見、情報それ自身が語りかける示唆」(川喜多, 1967)や「親近感を覚える」(川喜多, 1967)ことを重視した。質問項目ごとのチーム編成の後に、図解化を行った(Figure 1)。

どのチームにも所属しないと考えられたものを省かず、無理にチームに編成しなかった。

#### (2) 空間配置と図解化

チーム編成の際につけた一行見出しと自由記述を読み込み、各チームを空間配置した。また、空間配置の際は、参加動機から3つのプログラム目標へと至る過程を意識しつつも、各チームの関係と配置について意味と論理性を批判的に検討するよう努めた。空間配置の作業の中で、チーム編成が合理的でないことが判明した場合は、チーム編成を再検討した。多角的・重層的に矢印や囲いなどの様々な記号を用いて図解化した(Figure 1)。

#### (3) 文章化

空間配置におさまりができたと判断された時

に、空間配置の意味する内容を文章化し、空間配置の適合度をチェックした。文章化するうちに、図解化した内容との整合性がとれない事態が起こった場合、自由記述を参照しながら各チームの関係にどういう意味があるか、どういう配置であれば論理的に最も納得いくかに注意して、再図解化もしくは文章化を繰り返した。

## 2) 妥当性の確認

自由記述の分析は、まず、研究者によって行った。次に、本プログラムのファシリテーター5人と研究者とが、結果の精緻化及び妥当性を高める作業として、実際のプログラムの活動内容と図解化および文章化の内容との整合性と妥当性について検討し、図解化と文章化についての合意形成を行った。

## 4. プログラムの実施内容

### 1) プログラムの構造

初めて生後2～3か月の子を持つ母親で子どもが同じ誕生月の人を対象としている。定員が12組で、保育付きで、週に1回実施し、連続4回を1クールとしている（年間12クール）。各回は2時間～2時間30分である。

各回は、赤ちゃんと参加者の「同室」場面から始まり、赤ちゃんと輪になって座り自己紹介や前回の振り返りなどを行う。次に、赤ちゃんが別室で保育される「別室」場面となり参加者たちはグループワークを行う。グループワークに入る前にアイスブレイクを必ず行う。グループワークの内容は、第1回では「みんなに聞いてみたいこと、心配なこと、気になること」（付箋に書き出し分類後、参加者の意見を共有する）、第2回では「赤ちゃんがいて良かったことと悪かったこと」（育児に関する気持ちを共有）と「パートナーの良い点2つ困った点3つ」（配偶者に対する思いを共有する）、第3回では「自分と子どもの現在・過去・未来」（時間の流れを意識化することで今を相対化する）を行う。母子別室で行われるグループワークは1時間から1時間半である。最後に、赤ちゃんと参加者が再会する「同室」場面（保育スタッフからの一言や母子による手遊びや絵本の読み聞かせ）となる。第4回は自主サークル化に向けた練習である。保育がない。全て「同室」場面で行われ、

お互いに子どもを預け合いながら子どもの名札作りを行い、後半の30分で自主サークル活動の注意点などをファシリテーターが伝え、交代で行う世話係を参加者の中から決める（NPO法人ウイズアイ、2014）。

### 2) ファシリテーター

ファシリテーターは、プログラムを進行し、グループワークを行えるスキルを持つ者で、参加者が居心地よく感じられるように配慮し、参加者が自分のことを語れるように促す。本調査実施当時は、ベテランファシリテーター（経験年数10年以上）が2名、新人ファシリテーター（経験年数1年以上3年未満）が6名で実施している。なお、本プログラムの資格制度はなく、ベテランファシリテーターによる事前研修が行われている。

## 5. 倫理的配慮

アンケートは無記名かつ強制ではなく任意の回答であり、公表時には秘匿化しプライバシーが守られ、回答しないことによる不利益は一切ないことを書面で説明して実施した。アンケートに回答することで調査への協力に同意したとみなした。なお、自由記述に個人が特定できるものが含まれた場合、意味を損ねない程度に改編した。

## 結果

### 1. 図解化と文章化

チーム編成の結果は、参加動機（自由記述74、小チーム15、中チーム3、大チーム2）、家族との関係を再確認（自由記述58、小チーム11、中チーム5、大チーム1）、親として成長（自由記述61、小チーム14、中チーム6、大チーム2）、助け合える関係（自由記述56、小チーム13、中チーム5、大チーム2）の自由記述ごとに4つの表に整理した。しかし、本論文では字数制限があることから全ての表を掲載せず、その結果の一部をTable 1に示した。そして、4つの表に整理された内容の説明の重複を避け、ここではFigure 1の文章化を記述した。Figure 1には一行見出しやチーム名を空間配置し、プログラム参加経験のプロセスとして整理した。

Table 1 家族との関係を再確認の分類結果の例示 (一部)

チーム名 (大・中・小チーム) の一行見出し	自由記述の一行見出し	自由記述
	『夫との協力体制あり』	「夫と協力体制が取れていること。29」
〈夫の協力を再認識〉	『夫がやってくれていることがわかる』	「夫がいかによくやってくれているかが分かりました。27」
《現状の認識》	『でも協力してくれている』	「ほかの人に話して、でも協力してくれていると思った。33」
	『主人は何もしない』	「うちの主人は本当に何もしないことが改めてわかりました。今後もうまくやっていけるかは分かりません…。28」
	『夫を大切にしなければ』	「夫を大切にしないで…と思った。14」
〈夫を大切にしよう〉	『大切にしよう』	「イライラすることももあるけど、大切にしようと思った。33」
《夫に関心を向ける》	『旦那のいいところを見つけようとする』	「旦那のいいところも見つけようと思った (笑)。38」
	『夫との関係・気持ちを直す』	「夫との関係や気持ちを冷静に見つめなおせた。50」
《夫との会話を増やす》 (小チーム, 一行見出しは省略)		
《夫を育児に巻き込む》 (小チーム, 一行見出しは省略)		
	『夫にもやさしくなれた』	「夫にも優しくなれました。12」

【夫との関係を結び直す】



なお、3つのプログラム目標に関する回答で『わからない』といった編成できない記述も Figure 1 に記載した。

## 2. 参加動機

参加動機は、【出会いたい】と【交流したい】に整理できる。参加者は単に〈知り合いを作りたい〉や〈友達を作りたい〉や〈ママ友を作りたい〉といった理由だけでなく、『住んでいるところで月齢の近い子を持つママ友を作りたい』のである。『同じ月齢の子やママと知り合いになれると思った』や『同じ月齢の子と出会う機会が楽しそう』や『同じ月齢の子とママに知り合い、今後も情報交換できるきっかけになれば』という近い未来に期待しながら参加している。そして、『X市に友達がいないので』や『誰とも話さず孤独で友達が欲しかった』というものがある。以上が【出会いたい】理由である。しかし、出会うだけでなく【交流したい】から参加している。交流の内容は〈情報交換したい〉や〈悩みを話したい〉や「他の人と話したい」といった会話を通した交流である。そして、『引越してきて友達がおらず交流を持ちたい』のである。とりわけ、『近くで同じくらいの月齢の子を持つママと交流したい』のである。

他に『興味があった』や〈気分転換したい〉や〈外出したい〉といったものがある。そして、『知りたい』こともある。その具体例は地域のことや情報だけではなく、『同じ月齢の赤ちゃんをいろいろ見れる』ことも含まれる。また、〈子育てに不安があった〉ことや、〈人から進められた〉ことや『児童館は月齢がいろいろでハードルが高い』という参加動機もあった。

## 3. 家族との関係を再確認

家族との関係を再確認するは、【夫との関係を結び直す】過程を経ることで《家族に対する気持ちに気づく》ことに集約した。最初に《現状の認識》がある。〈夫の協力を再確認〉するし、あるいは『主人は何もしない』ことを再確認する。次に《夫に関心を向ける》ことと《夫を育児に巻き込む》へとつながる。《夫に関心を向ける》ことで《夫との会話を増やす》のである。同時に《夫を育児に巻き込む》。〈夫と協力

して育児する大切さ〉に気づくと〈夫に家事・育児を頼む〉や、あるいは〈夫と一緒に子について考え始める〉ようになる。また、『夫に関心を向ける』ことや『夫との会話を増やす』ことで〈夫と一緒に子について考え始める〉ようになる。〈夫と一緒に子について考え始める〉ことで『夫がより子どもに興味を持つ』ようになる。『夫がより子どもに興味をもつ』ようになることは〈夫に家事・育児を頼む〉ようになることに関連する。〈夫と協力して育児する大切さ〉に気がつき、〈夫に家事・育児を頼む〉ことで〈夫が協力してくれるようになった〉と認識する。他の家の『パートナーの協力具合が参考になった』と認識することで〈夫と協力して育児する大切さ〉に気がつく。また、『夫との関係を結び直す』ようになる中で『夫にもやさしくなれた』という気づきに至る。

《家族に対する気持ちに気づく》ことは《現状の認識》からつながる。夫なのか拡大家族なのか不明だが『支えてくれる家族がいる幸せを再確認』し、あるいは『家族のキズナが深まった』と認識する。特に、〈夫が協力してくれるようになった〉という認識から〈夫への感謝とありがたさ〉を感じる。また、夫以外の〈家族への感謝〉の気持ち生まれ、『親の気持ちが変わるようになった』と気づく。さらに、子が『愛おしくかわいい、私がママ』と思い『子育てが楽しくなってきた』り『子とのかかわり方に慣れてきた』と気づく。ただし、『主人は何もしない』や『今までどおり』や『特になし』というように変化を実感できない場合もある。当然、家族との関係を再確認できたかどうか『わからない』ということもある。

## 4. 親として成長

親として成長は、プログラムに参加し、『出かけやすくなる』などの〈子どもを連れて外出できる〉ということだけでなく、『いろんな人と関わろうとする』などの〈子のために他者とのつながりを得ようとする〉というように《家族以外とつながる》ことで、『気持ちの変化』と『関わり方の変化』が生じていることに集約した。

【気持ちの変化】とは《余裕やゆとりを持つ》ことである。また、〈自分を客観視〉し、〈頑張

ろう)という気持ちも生まれる。子どもへの気持ちは『子がより愛しく思える』や『子と楽しく触れ合う喜びを感じる』や『育児に前向きになれた』といった肯定的な方向での変化が生じている。そして、『今しかないこの1秒を大切にしたい』や『責任もって楽しく子育てしよう』という気持ちが生じている。交流を通して『他の人が頑張っていることがわかり自分もいい親になればいいな』と思う。

《余裕やゆとりを持つ》ようになってくると【関わり方の変化】が生じてくる。まず、《子に働きかける》ようになる。次に、《子への理解が深まる》。子に働きかけ、子の理解が深まってくると《子への接し方がポジティブになる》。子どもだけでなく《夫に落ち着いて関わる》ようになる。さらに、『周囲への気遣いができる』。当然、親としての成長ができたどうか《分からない》や『思い浮かばない』や『特になし』ということがある。ただし、『まだ実感ないが、これから成長できればいい』ということもある。

## 5. 助け合える関係

助け合える関係は、【助け合える関係を体験する】ことで【今後も助け合っていく】という志向性をもつようになることに集約した。プログラムへの参加は《交流機会を活かす》ことで、《交流場面での肯定的な体験》をもたらす。具体的には、《同じなんだという安心感を得る》や《その場で仲良くなれる》や《その場で情報を得て解決できる》の他に『一人ではないという安心感が持てる』などである。このような体験を経て【今後も助け合っていく】。《友達ができる》や《相談相手ができる》。そして、《関係を継続していきたい》と思うようになってくる。さらに、『他のママにも優しくできそう』や『夫にも助けられる』と考える。助け合える関係が得られたかどうか『まだわからない』ということもある。

## 考察

### 1. 参加動機

本研究で参加者の立場から参加動機（ニーズ）が明らかとなったことで、宇野（2016）で整理した「情報を求めている」、「孤立しがち」、

「仲間を求めている」、「育児経験の不足」、「育児不安を抱きがち」といったプログラム対象者のニーズと重なるところが多いことがわかった。参加者は気分転換や外出したいという個人の欲求を満たすためや地域のことなどを知りたいことがあって参加している。また、人から勧められて参加した人もいる。しかし、本質的には、同じくらいの月齢の子を持ち、近所に住み、育児をしている者と出会い、交流したいのではないかと考えられる。また、参加動機（ニーズ）は充足されていることもうかがわれた。例えば、定期的に出かける場所があること、すなわち本プログラムに参加することで《子どもを連れて外出できる》ようになる。また、外出し《出会う機会を得る》ことで気分転換になるのではないかと考えられる。出会いたい、交流したい、知りたいという参加動機（ニーズ）は【助け合える関係を体験する】ことで満たされているのではないかと考えられる。特に同じくらいの月齢の子を持ち、近所に住み、育児をしている者との出会いと交流のニーズを満たし、そして、出会いたい、交流したいという参加動機（ニーズ）が満たされると、【今後も助け合っていく】という新たな関係が生まれる。このように整理すると、参加者の経験を無視することはできない。よって、【出会いたい】【交流したい】【知りたい】《気分転換したい》《外出したい》《子育てに不安があった》をプログラム対象者のニーズに反映させる必要がある。都筑・金川（2001）の出産後から4か月までの間に生じた母親の育児上の不安とその解消方法、育児情報源に関する調査によると、第1子母親は第2子母親よりも育児不安が高く育児に対する自信がなく、また、育児情報源として友人を少なく選んだ。都筑・金川（2001）の結果から第1子母親が第2子母親よりも友人を少なく選んだ理由を推測すると、本来は友人との出会いを求めている可能性があるにもかかわらず、友人に出会うきっかけがなかったと考えられる。つまり、本研究で得られた参加動機の一部を、本プログラムの対象者のニーズとすることは妥当であると考えられた。

今回の結果を反映したプログラム対象者のニーズは、「情報を求めている（知りたい）」、「孤

立しがち(会いたい・交流したい)、「仲間を求めている(会いたい・交流したい)」、「育児経験の不足(知りたい)」、「育児不安を抱きがち(子育てに不安がある)」、「気分転換したい」、「外出したい」である。単に出会い、交流したいのではなく「同じくらいの月齢の子を持ち近くに住む母親と出会い、交流したい」というニーズがあると考えられた。宇野(2016)では、主に支援者を通して明らかとなったプログラム対象者のニーズであったが、本研究によって参加者の望むニーズを反映できたことで、プログラム対象者のニーズをさらに具体的に記述することができた。なお、プログラム対象者のニーズとして「家族関係の再確認」を追記する。その理由は以下の「2. 家族との関係を再確認」で述べる。

ところで、参加者のニーズとして取り上げられていた産後うつ病の発症リスク低減(宇野, 2015)は、宇野(2016)と同様に本研究からニーズとして位置付けるかどうかは不明であった。

## 2. 家族との関係を再確認

結果では様々な意見が抽出され図解化された。家族には両親や子どもも含まれていた。しかし、ここで認識されている家族とは本質的に夫のことである。なぜなら、夫に関する記述が多く、かつ本プログラムの第2回目を行うグループワーク「パートナーの良い点2つ、困った点3つ」のように、特に夫に焦点づけているからである。よって、夫との関係性の視点から考察することでより精緻化されると判断した。

宇野(2016)では父親(夫)に対する認識の変化として、「夫に不満を持つ妻の言動に変化がみられた」という記述があったこと、また、「家族との関係を再確認」とは「父親(夫)にもっと頼ってよいのではないか」という意識をもつことや、実際に、父親(夫)に働きかけること(NPO法人ウイズアイ, 2014)と説明されている。しかし、参加者の認識や経験が反映されておらず、プログラム目標の記述内容が不十分であった。本研究では、母親(妻)の言動の変化についてより詳細な情報が得られた。

プログラム目標は次のように再記述する必要

がある。「家族との関係を再確認する」あるいは「夫に対する認識の変化」という記述からより参加者の主体的な動きを反映して、かつ、夫という役割に限定しないパートナーという表現に変えて「パートナーとの関係を結び直す」に変更し、現状を認識し、パートナーに関心を向け、パートナーとの会話を増やし、パートナーと協力して育児をすることの大切さに気がつき、パートナーといっしょに子について考え、いつもよりパートナーに育児や家事を頼むことである。

ところで、夫が協力してくれるようになったという記述があった。しかし、夫を変化させることは間接的であってプログラムの範囲を超えている。同様に、夫への感謝とありがたさへの気づきについては夫の在り方に影響されると考えられ、プログラムの範囲を超えている。よってこれらは、プログラム目標としては妥当ではないと考えた。

なお、プログラム目標にある夫に対する認識あるいは家族関係の再確認に関する具体的なニーズは参加動機の詳細記述から明らかにできなかった。しかし、【夫との関係を結び直す】という参加者の主体的な動きにあらわれているように、夫やあるいは家族との関係性に関するニーズが潜在化していると考えられる。家族をシステムとして見立てた場合、0歳児を初めて持つ家族は、パートナーとの二者関係から子どもを含めた三者関係へとシステムが変化する家族ライフサイクルの移行期であり、夫婦サブシステムと親サブシステムがともに機能するように工夫が大切な時期であり(岡堂, 2000, pp.50-52)、家族間のコミュニケーションを通して家族関係の調整が必然的に求められる。このような時期に、パートナーとの関係性を見直す必要があり、そのきっかけを本プログラムから得ている可能性が示唆された。したがって、プログラム対象者のニーズとして「家族関係の再確認」として記述し、プログラム目標との因果の連鎖をより明確にした方が妥当であると考えた。

### 3. 親として成長

宇野(2016)では育児方法の獲得、育児不安の解消と自信の獲得が挙げられた。ただし、育児方法の獲得は具体的にどのような方法で何を獲得しているのかがあまり明確ではなかった。また、「親として成長する」とは「子育てへの前向きな変化(肯定的な気持ちの他に育児に対する過度の不安を抱くことなく、育児に対する自信を得ていくことを含めている)」と「子育てのスキルアップ」とされている(NPO法人ウイズアイ, 2014)。結果から、これらの先行研究と内容が重なることがわかった。しかし、参加者の認識や経験をさらに反映し、プログラム目標を次のように再記述する必要がある。すなわち、「親として成長する」という表現は抽象度が高すぎるので「余裕やゆとりの回復」を経て「育児方法の獲得」をし、そして「育児不安の解消と自信の獲得」をする、である。その内容は、子どものために家族以外とつながろうとし、気持ちの変化として余裕やゆとりを持ち、自己を客観視し、頑張ろうと意欲を高め、子どもや子育てに対して肯定的な気持ちを高めることである。また、関わり方の変化として子どもへの接し方や育ちに関する理解が深まったり、子どもに試行錯誤しながらいつもより働きかけたり、子どもへの接し方がいつもより肯定的になったり、育児不安を低減し、育児に自信が持てるようになることである。ところで、母親のゆとりがあると子育て不安が低い(中村, 2004)という知見がある。今回の結果からは参加者が交流を通して気持ちに余裕やゆとりを持つことが要となり、育児不安の解消と自信の獲得をプログラム目標とした方が適切だと考えられた。さらに、育児方法の獲得の内容としてあやし方や遊び方のレパートリーに関する意見があり、内容を具体的にできた。

なお、(夫に落ち着いて関わる)ようになることを親としての成長と捉えた者がいるが、なぜそのように捉えるのかについては今後の課題としたい。

### 4. 助け合える関係

宇野(2016)では孤独感の軽減と自主サークル化が挙げられた。また、「助け合える関係を

つくる”きっかけを得る」とは、「ママとしてだけではなく、私と人がつながること」や「ママではなく自分・個人としてつき合えること」であり、「一人の人間として出会うこと」とされているが(NPO法人ウイズアイ, 2014)、記述内容の抽象度が高すぎて実際にプログラムに参加することで参加者に何が生じているのという視点から再検討する必要がある。結果から、これらの先行研究と内容が重なることがわかった。しかし、参加者の認識や経験をさらに反映し、プログラム目標を次のように再記述する必要がある。すなわち、「助け合える関係を作る”きっかけを得る」という表現はプログラムへの参加体験のことと考えられ、より具体的な「自主サークル化」とする。自主サークル化に至るには「余裕やゆとりの回復」が必要で、そのうえで「孤独感の軽減」が生じると考えられる。また、結果で示した【助け合える関係を体験する】はプログラム目標ではなく、プロセス理論に関わる内容でアウトカムと関連する効果的援助要素<sup>5)</sup>と考えられた。ただし、この中の〈その場で情報を得て解決できる〉はアウトカムに関連する記述と考えられた。自主サークル化の内容は、【助け合える関係を体験する】というプログラムプロセスを経ることで、【今後も助け合っていく】という志向性をもつようになることである。つまり、友達や相談相手ができ、会が終わっても関係を継続していきたいと考え、実際に自主サークル活動の準備をすることである。

結果では「ママとしてだけではなく」といった役割の相対化に関する意見はなかった。参加者は、役割を相対化するという動機や視点から参加しているわけでない可能性があり、この記述には支援者の願いが強く反映されていたと考えられる。孤独感の軽減については、ママ友達がいない者はいる者に比べ、孤独感が高いことが明らかとなっている(馬場・村山・田口・村嶋, 2013)。孤独感の軽減はプログラムに参加し、交流することで達成できる可能性がある。例えば、本研究では『一人ではないという安心感が持てる』と答えた参加者がいた。

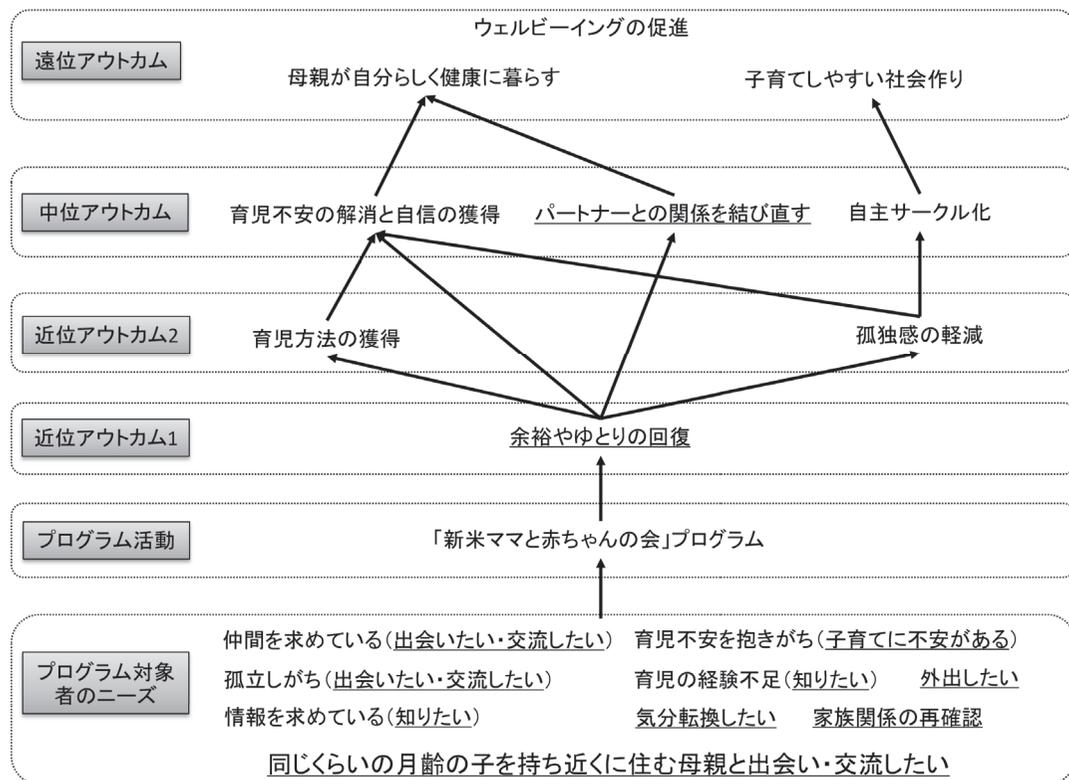
5. インパクト理論の再構築

総合的考察の結果、Figure 2のように参加者の認識を反映させたインパクト理論が整理できた。この図は下から上へと因果の連鎖 (if-then, もし~であれば~である) を示している。プログラム対象者のニーズに対して本プログラムがあり、本プログラムにおいてグループワークなどの活動を体験し、その結果、最も早く得られる効果として「余裕やゆとりの回復」(外出したい・気分転換したい)があり、「余裕やゆとりの回復」が得られるとほぼ同時に、「育児方法の獲得」(情報を求めている(知りたい)・育児の経験不足(知りたい))が得られる。プログラムの回が進むと、「余裕やゆとりの回復」と「育児方法の獲得」によって「育児不安の解消と自信の獲得」(育児不安を抱きがち(子育てに不安がある))となり、「パートナーとの関係を結び直す」(家族関係の再確認)ことになる。「余裕やゆと

りの回復」から次第に「孤独感の軽減」(孤立しがち(出会いたい・交流したい))があり、参加者はプログラム終了後も交流を継続するために自主サークル(仲間を求めている(出会いたい・交流したい))となっていく。最終的にはウェルビーイングを目指す。なお、図中の概念で下線が引かれているものは、宇野(2016)で図示したインパクト理論にはなかったものであり、本研究で新たに追加・修正した概念である。

6. 本研究の限界と今後の課題

本研究はプログラム参加者から得られた自由記述をもとにインパクト理論の再構築を行った。この方法ではプログラム参加者のニーズや認識を限局化した可能性がある。半構造化面接法やフォーカスグループインタビュー法などを用いて参加者の認識を明らかにすることも必要である。



図は下から上へと因果の連鎖を示している。なお、図中の概念で下線が引かれているものは、宇野(2016)で図示したインパクト理論にはなかったものであり、本研究で新たに追加・修正した概念である。

Figure 2 本研究から再構築されたインパクト理論

インパクト理論で示されたものは仮説検証が行われていない。今後、アウトカム試行評価が必要である。自由記述の中には参加者の認識する変化に関係するものがあつた。これらの自由記述を精査し、本プログラムのアウトカムを測定できる尺度の開発が必要である。

図解化と文章化によってデータの意味とその関係を見出すことができた。この結果はプログラム参加者の参加体験のプロセスの一部を示したものであつた。より詳細に参加前、参加中、参加後という時間軸を設定し、プログラム参加者がどのような体験をしているのかを明らかにする研究も必要であろう。

## 結論

本研究は「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムのプログラム対象者のニーズとプログラム目標に関する仮説を再検討することが目的であつた。プログラム参加者から得られた自由記述をKJ法によって分類し、図解化と文章化を得た。

結論として、プログラム対象者のニーズとプログラム目標の内容の変更が必要で、より精緻化されたインパクト理論が再編成された。今後、得られた仮説をもとに、試行的アウトカム評価を行う必要がある。

## 付記

本研究は平成26(2014)年度文部科学省科学研究費助成事業若手研究B「0歳児の養育者支援プログラムの実践と開発評価」(課題番号26870548)による助成を受けた。

## 文献

馬場千恵・村山洋史・田口敦子・村山幸代(2013). 乳児を持つ母親の孤独感と社会との関連について—家族や友達とのソーシャルネットワークとソーシャルサポート—日本公衆衛生雑誌, 60(12), 727-737.

Butchart, A., Harvey, A. P., Mian, M., Fūrniſs, T. & Kahane, T. (2006). *Preventing child maltreatment: a guide to taking action and generating evidence*. Geneva: World Health Organization(ブッチャー A. ハーベイ A. P. ミア

ン M. フェルニス T. ケーン T. 小林美智子(監修) 藤原武男・水木理恵(監訳)坂戸美和子・富田拓・市川佳世子(訳)(2011). *エビデンスに基づく子ども虐待の発生予防と防止介入—その実践とさらなるエビデンスの創出に向けて—* 明石書店

河合直樹・野口啓示(2007). *ペアレント・トレーニングを用いた家族再統合への援助—効果測定の試み—* 子どもの虐待とネグレクト, 9(3), 373-383.

川喜田二郎(1967). *発想法—創造性開発のために*. 中公新書

厚生労働省(2017). *子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について(第13次報告)* Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000173329.html> (2018年9月22日)

厚生労働省(2018). *児童虐待防止対策の強化に向けた緊急総合対策について* Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000336046.pdf> (2018年9月22日)

厚生労働省(開設年月日不明). *児童虐待防止対策* Retrieved from [https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo\\_kosodate/dv/index.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/index.html) (2018年9月22日)

中村敬(2004). *育児不安軽減に向けた取り組み* 小児保健研究, 63(2), 118-126.

岡堂哲雄(2000). *家族カウンセリング* 金子書房

大島巖(2011). *円環的対話型評価アプローチ法実施ガイド* Retrieved from <http://cd-tep.com/> (2018年7月30日)

Rossi, P. H., Lipsey, M. W., & Freeman, H. E. (2004). *Evaluation: A Systematic Approach, 7th ed.* New York: Sage Publications. (ロッシ P. H. リプセイ M. W. フリーマン H. E. 大島巖・平岡公一・森俊夫・元永拓郎(監訳)(2005). *プログラム評価の理論と方法—システマティックな対人サービス・政策評価の実践ガイド—* 日本評論社)

庄司順一(2008). *子ども虐待はなぜ起こるのか* 高橋重弘(編). *子ども虐待(新版)* (pp.93-105) 有斐閣

柴田俊一(2006). *親教育プログラムNobody's Perfectの短期的効果について* 子どもの虐待とネグレクト, 8(1), 114-118.

都筑千景・金川克子(2001). *出産後から産後4か月までの子をもつ母親に生じた育児上の不安とその解消方法—第1子の母親と第2子以上の母親における比較—* 日本地域看護学会誌, 3(1), 193-198.

特定非営利活動法人ウイズアイ(2014). 「新米ママ

と赤ちゃんの会」プログラム実施マニュアル(初版) 特定非営利活動法人ウイズアイ

宇野耕司(2015). 初めて0歳児を持つ母親を対象とした効果的な「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムモデルの開発—実践家・利用者参画型によるプログラム開発の取り組みから 目白大学心理学研究, No.11, 15-27.

宇野耕司(2016). 「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムの評価可能性アセスメント 目白大学心理学研究, No.12, 15-28.

宇野耕司(2018). 「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムの試行評価 日本子育て学会第10回大会発表論文集, 50-51.

宇野耕司・藤岡孝志・三好真人・渡邊瑞穂・永野咲(2016). 児童養護施設における援助者支援のニーズと方法に関する仮説生成 子ども家庭福祉学, No.16, 16-28.

山本真美(2008). 子ども虐待を予防するために 高橋重弘(編). 子ども虐待(新版)(pp.205-227) 有斐閣

柳川敏彦・平尾恭子・加藤則子・北野尚美・上野昌江・白山真知子・山田和子・家本めぐみ・包丁高子・志村光一・梅野裕子(2009). 児童虐待予防のための地域ペアレンティング・プログラムの評価に関する研究—「前向き子育てプログラム(トリプルP)」の有用性の検討—子どもの虐待とネグレクト, 11(1), 54-68.

#### 【脚注】

1) プログラムゴールとは「通常、一般的で抽象的な、プログラムが指向する望ましい状態についての叙述」である(Rossi, Lipsey & Freeman, 2004大島巖監訳2005)。

2) プログラム目標とは「プログラムがその達成を望まれていることを詳述する特定の叙述で、ひとつ以上の測定可能な成功基準を伴う」ことである(Rossi, Lipsey & Freeman, 2004大島巖監訳2005)。

3) 評価可能性アセスメントは、「プログラムが評価に必要な前提条件を満たしているかどうかを確認し、前提条件が満たされていれば、評価をどのようにデザインすればよいかを調査し、確認する評価活動」である(大島, 2011)。

4) プログラム理論とは、「社会プログラムがどのように効果をもたらすのか、どのような要素が効果に影響するかに対して明確な見通しを与える因果関連やプログラム要素に関する一連の仮説群である」とされている(大島, 2011)。また、プログラム理論はインパクト理論とプロセス理論から構成されている。インパクト理論とは「あるプログラム活動が引き金となる原因で、結果としてある社会的便益が得られるような因果連鎖を記述した因果理論」とされ、因果関係の系列として記述され、記述の際の各要素が原因と結果のいずれかとなる(Rossi, Lipsey & Freeman, 2004大島巖監訳2005)。プロセス理論は「プログラムの組織計画とサービス利用計画とを組み合わせ、プログラムをどのように運営するかという仮定と期待を全体的に記述したもの」である(Rossi, Lipsey & Freeman, 2004大島巖監訳2005)。

5) プログラムの援助効果を生み出すことに重要な貢献をする、プログラムの効果的な実施方法である(大島, 2011)。

—2018年9.26.受稿, 2018年12.17.受理—

## Reconsideration of the program needs and program objectives of the “First-time Mothers and Babies Program (FMBP)”

Koji Uno      Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2019 vol.15

### **[Abstract]**

This study reports on the improvement of program needs and program objectives. For this purpose, a free description type questionnaire survey was conducted after the FMBP (8 courses). The participants were first-time mothers (N=64) with two- or three-month-old infants. A total of 52 valid responses were obtained. The surveys were then analyzed using the Jiro Kawakita method.

The results, the existing program needs should be more focused on program participants needs, and we added the new program needs to existing program needs. Those new program needs are “a change of mood,” “go out of a house.” and “recognition to her family relationship.” With regard to program objectives, we added a new program objective “refresh and recover,” to existing program objectives. And, we re-wrote the existing program objective “recognition to her partner,” into “reformulate parenting partnership.” With regard to program goals, the hypotheses need not have improved.

Further research is required to evaluate to these improved hypothetical models.

**keywords** : infant, social support for parenting, community-based approach, program evaluation, Jiro Kawakita (KJ) method

